令和５年度　東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

令和５年９月　第５号

校長　阿久津　光生
〒114-0002
東京都北区王子 5-2-8
Tel 03-3911-8817

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標　**自ら**学び　**自ら**考え　**自ら**行動できる生徒

《９月１日（金）　一学期後半がスタートしました》

いよいよ、本日９月１日（金）から一学期後半がスタートしました。今日から改築ステーションでの学校生活が始まりです。生徒のみなさんは送迎バスでの通学となり、慣れるまで大変だと思いますが、みんなで協力して頑張っていきましょう。

これから１学期後半が始まるにあたって、みなさんにお伝えしたいことが３つあります。

まずは、事故・ケガ・熱中症・感染症には十分気をつけて過ごして欲しいということです。生命を守り、安心・安全な生活を送ることが何よりも大切です。

第２は、自分の目標に向かって、スモールステップで精一杯頑張ることです。どんな逆境でも、ピンチをチャンスに変えるという思いを持って、焦らずコツコツと努力していけば、必ず目標に到達することができます。前を向いて進んでいきましょう。

第３は、一人で悩まないこと、助け合うことです。悩みは、誰もが持っています。１人で抱え込まず、先生や友人、さまざまな相談窓口に話してください。そして、他人の痛みや苦しみを理解して、互いに信頼し合い、協力しあっていきましょう。

生徒の皆さんと教職員一同で力を合わせ、PTA の皆さま、地域の皆さまのご支援を励みに、この改築ステーションでも今までと変わらない温かい学校をつくりあげていきましょう。

《７月 16 日（日）　PTA 主催イベント【ありがとう堀中】　2,000 名もの方にご来場いただきました》

７月 16 日（日）、PTA 主催イベント【ありがとう堀船中】が午前 10 時より開催されました。11 時にはオープニングセレモニーが行われ、その後２部制の舞台発表・フィナーレの順に行われたイベントは、およそ2,000 名もの方々にご来場いただきました。

セレモニーの校長あいさつを掲載いたします。

「本日は、北区長やまだ加奈子様、北区教育長清正浩靖様、東京都議会議員大松あきら様、北区議会議員金田よしあき様、昭和町地区自治会連合会会長・昭和町自治会会長・第 18 代 PTA 会長松本晴光様をはじめ多くのご来賓の皆さまのご臨席を賜り、「ありがとう堀中」を開催できますことに心より感謝申し上げます。そして何よ

りも、子どもたちや歴代の卒業生の皆さまのために、このイベントを支援してくださいました、堀船地区・昭和町地区それぞれの連合自治会・町会の皆様、両青少年地区委員会の皆様、同窓会の皆さま、PTA 顧問会の皆さまに改めて感謝申し上げます。早朝より大変暑い中、イベントのお手伝いをしてくださり、本当にありがとうございます。

この「ありがとう堀中」は、小林 PTA 会長をはじめとする PTA 役員の皆さまと、在校生、卒業生が、準備のために連日連夜たくさんの時間をさいて、試行錯誤を繰り返し、大変なご尽力をしてくださったおかげで開催できる運びとなりました。そんな本校 PTA の皆さんと生徒たちの手作りの催しを、本日ご参加してくださった皆さまが安心・安全にお楽しみいただけること、そして皆さまにとって、一生の思い出に残る会になりますことを祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。」

様々な世代の方々が一堂に会したこの日、堀中の懐かしい校舎を前に昔話に花を咲かせ、体育館でのイベント等に目を細め、中学校時代の仲間や先生に再会してとっても喜んでくださっている卒業生や関係者の笑顔を、至る所で拝見することができました。堀船中がたくさんの皆さま方に愛されていることを改めて確認できた素敵な一日となりました。校舎移転後も、皆さまが築き上げてくださった伝統を守り続けて、さらにより良い堀船中学校を目指して邁進していく覚悟です。引き続き、堀船中学校をご支援くださいますようお願い申し上げます。

《8 月 19 日（土）『堀船夏祭りファイナルドキドキ　パート 2』が開催されました。》

8 月 19 日（土）15 時より、『堀船夏祭りファイナルドキドキ　パート 2』が開催されました。

この『堀船夏祭りファイナルドキドキ　パート 2』は、PTA 役員の皆さまと、子ども実行委員のみなさんで企画・運営をしてくださいました。そしてなんと、114 名もの生徒の皆さんと、たくさんの PTA の方々が参加してくださったため、とっても楽しいイベントとなりました。

快晴だったため、事前に考えていた「晴れバージョン」の校庭と校舎内を使ったイベントが行われました。まずは校庭で堀船水合戦に挑みました。真夏の日差しの中の水合戦は涼しさを感じられて、みんなもとっても楽しそうで最高でした。次に宝物ドロケイで盛り上がった後は、みなさんが最もドキドキ・楽しみにしていた肝試しです！何も物がなくなった保健室や教室、新校舎と、長い距離を歩き回るだけでも怖いのに、PTA のみなさんがたくさんのアイディアを考えてくださったおかげで、夏の暑い夜も氷つくほどの恐怖が体験出来ました。暗くて熱くて怖―い校舎で、長時間に渡りお化けや仕掛けをしてくださった皆様、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

20 時過ぎに解散となりましたが、楽しくてあっという間に時間が過ぎていきました。参加者全員分のお弁当や飲み物まで用意してくださり、至れり尽せりのおもてなしでした。

参加されたみなさんにとっては、『堀船夏祭りファイナルドキドキ　パート 2』が一生の思い出になったと思います。移転前の最後に、生徒のみなさんに楽しんでもらおうと、こんな素敵な企画をしてくださった PTA の皆様、そして子ども実行委員のみなさんに、心から感謝申し上げます。

津田梅子の生き方（4）～アメリカへ～

横浜から出港しアメリカに向かった日本人一行は、長い航海の間、壮絶な船酔いに苦しめられます。それは梅子たちのような子供であればなおさらでした。絶え間なく船を揺らす波に苛まれ、食事もろくに喉を通りませんでした。船内での 5 人の留学生のお世話は、アメリカに帰国するアメリカ公使・チャールズ・E・ディロングの夫人がしてくれました。ただし、ディロング夫人は日本語を話せず、女子留学生たちも英語を話せなかったので、きちんとした意思疎通は図れませんでした。

一行を乗せたアメリカ丸は 24 日間の船旅を終えると、翌 1872（明治 5）年 1 月、ようやくサンフランシスコに到着します。久しぶりに陸の上を歩いた梅子たちは、おぼつかない足取りのままホテルに到着します。そして実際にアメリカで暮らす人々の姿を目の当たりにして、目を丸くすることになるのです。一方で、迎えるアメリカ人たちも、振袖姿の 5 人の日本人留学生たちを見て非常に珍しがったといいます。

雪が降り続いたため汽車が動かず、サンフランシスコに半月ほど滞在した梅子たちは、2 月 25 日、ようやくミシガン湖の南に接するシカゴに到着しました。この頃ようやく、梅子たちは洋服を買ってもらっています。フリルの付いたドレスと帽子と靴のセットでした。この時撮影したであろう記念写真が、今も残されています。それが右の写真です（1 番幼い梅子は山川捨松の膝の上に乗せられて写真に収まっています。左から永井繁子、上田悌子、吉益亮子、津田梅子、山川捨松）。

5人の留学生たちシカゴにて
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

同年 2 月 29 日、一行はようやく目的地のワシントンに到着しました。あたりには雪が 10 センチほども積もっていました。梅子は、吉益亮子とともにワシントン近郊のジョージタウンに住むランマン夫妻の家に預けられたのは、日本を発ってから約 70 日後のことでした。実は、5 人の留学生の後見人としてアメリカでの留学生活に責任を持っていた人物は、後に初代文部大臣になる森有礼でした。森は当時、日本弁務使館で少弁務使として駐米していました。森は自らの書記官を務めていたチャールズ・ランマン宅に数ヶ月間、幼い女子留学生たちを託しましたが、1872 年 5 月には、ワシントンのコネチカット街に自ら借家を借りて、家庭教師を雇ってレッスンを受けさせることで梅子たちの教育に当たりました。しかし、これでは、森が当初目指していた、女子留学生にアメリカの家庭生活を学ばせるという目的を果たすことができないことは明らかでした。そのような中、最初に梅子たちを預かってくれたランマン夫妻が、再び梅子の教育係に手を挙げます。夫妻には子どもがいなかったこともあり、特に妻・アデラインが当初から梅子を気に入っていました。日本から来た幼い梅子への愛情から、費用を負担してでも手元に置いて育ててみたいと希望したのです。そして梅子は、まるで夫妻の養女になったかのように愛情いっぱいに育てられ、ランマン家の家族として受け入れられることになります。

チャールズ・ランマンという人物は、20 代後半からジャーナリストとしていくつかの新聞社で職を得ましたが、30 代に入ってからは政府関係の図書館に勤務し、20 数年そこで働きました。書籍も数多く書いていて、絵画においても優れた作品を制作しました。梅子のホストマザーとして大きな役割を果たすことになる妻のアデライン・ランマンは、父が貿易を営む富裕な家庭に育まれ、女子の初等・中等教育では評価が高いカトリック系の歴史ある女子校で 16 歳まで教育を受けました。チャールズと結婚した際にはお祝いとしてレンガづくりの家を父から贈られており、その家で梅子は過ごすことになります。ちなみに、梅子を受け入れた時の 2 人は、チャールズ 53 歳、アデライン 46 歳でした。

一方、女子留学生の1人である山川捨松は、ニューヘイブンに住むレナード・ベーコン牧師の家庭に託されました。ベーコンは、奴隷制廃止論の著書も執筆している指導的な牧師でした。捨松はこのベーコン家で、2 歳年上のホストシスターとなるアリス・ベーコンと出会います。アリスは後に日本に赴き、華族女学校で梅子の同僚となる女性です。さらに梅子が女子英学塾を創設する際には、来日して最初に支援をしてくれた人物でもあります。

永井繁子もベーコン家を経由して、フェアヘイブンに住むジョン・アボット牧師の家庭にゆだねられました。ジョン・アボットは、母の役割を礼賛し、女性の道徳的優位性を強調した書物を書いています。

こうして 3 人の女子留学生のホストファミリーが決まりました。共通点は、必ずしも経済的に豊かではないものの教養のある人物達であるという点でした。一方、5 人のうちの吉益亮子と上田悌子は、慣れないアメリカでの生活の中で健康を害し、急遽帰国することになります。